



「あと1年しかない」

今年「トカちゃん一家の新たな家族は望まない」と考えていた子どもたちですが、「去勢はしてしまったけれど、トットの家族を何とか残したい、残してあげたい」という思いから、子どもたちはララの出産の可能性について動き始めました。そんな中、H君が「トカちゃんの出産は？」と静かに全体に投げかけました。

以前、ララの出産について考えていく中で、もし、ララがトカちゃんのように双子を産んだとしたら、ヤギが5匹になる可能性があること。5匹のヤギとの生活が自分たちに実現可能なのか、今のように丁寧なお世話をしていけるのか、子どもたちは話し合っていました。「大変になるのは、間違いない。でも、1年生の時の自分たちだったら、難しかったかもしれないけれど、今の自分たちであれば、ヤギが増えてもやっていけるのではないか」「大変になってもトットの家族を何とか残していきたい」こうした思いから、ララの出産、5匹のヤギとの暮らしの覚悟を決め出していった子どもたち。だからこそ、さらにヤギが増えていくトカちゃんの出産は、子どもたちの想定の外にあったかもしれません。

もし、トカちゃんが双子を産んだとすると、トカちゃん一家は最大で7匹になっていきます。その後の話し合いでは、「7匹って、今の2倍のお世話だよ。それはさすがに大変」「丁寧にお世話ができなかつたら逆にかわいそう」そんな思いが語られていきます。ですがH君は、そんな話し合いの後の振り返りでも「トカちゃんたちとお別れまであと1年しかない。『お世話が大変そうだから』って、赤ちゃんを産ませないのはかわいそう。トカちゃんたちがしたいようにしてあげたい」と綴っていました。そんなH君の思いに出合った子どもたち。すると、子どもたちは、そのH君の思いを、H君の姿と合わせて受け取っていくのです。毎朝のように家からニンジンを手にしながらか登校してくるHくん。朝の時間、外に出ると、トカちゃんたちを散歩させながら、ビニール袋に入れたニンジンを実を黙々とあげ続けるH君。子どもたちは、そんなH君を知っています。だからこそ、そんなH君の言葉は子どもたちに届いていきました。また、先日、雄ヤギの心君とお別れをした3-1の子どもたちの姿も子どもたちの中にはあったのかもしれません。暮らしを共にしていた動物と「別れる」ということ。まだ先のことではあるものの、自分たちにも、あの「別れ」という時間が訪れること。だからこそ、H君の「あと1年しかない」という言葉が子どもたちには響いていったようでした。



- ・自分たちで飼っているトカちゃんなんだから、トカちゃんが交尾したいなら、「交尾させてあげたい」じゃなくて、『交尾をさせなきゃいけない』と思う。(M君)
- ・「お世話が大変」だと、自分優先な感じがして、なんかもやもやする。トカちゃんも、トットもララもうれしい気持ちにしてあげたい。(Z君)
- ・もし、トカちゃんも赤ちゃんを産めたとしたら、それが、お別れの時に「ほしい人」の役に立っていかってことなんじゃないかな。(Aさん)
- ・あと1年しかない。トカちゃん一家の幸せを2-1のみんなで作っていききたい。それで、来年トカちゃんたちとの『さようなら』をみんなでしたい(D君)

話し合いの末、子どもたちは、ララの出産と、トカちゃんの2度目の出産を決め出していきました。